

## 「三日目に・・・最初のしるしを：変えられるということ」

### ヨハネによる福音書 2章1～12節

『朝日新聞』の「天声人語」欄に だいぶ前、面白いというか、考えさせられる文章が記されていました。私たち・人間の実際の姿を 身近な出来事から語ったものです。

<どうも釈然としないのです>。ある高校一年生から大意 つぎのような手紙が届いた  
▼夏休みに入って最初の一週間、彼女は知り合いの家で泊まった。共働きの両親と小学生の子ども二人の四人家族だ。<おじさんが言うのです。「わが家の子どもたちは、どうもおかしいよねえ。友だちが遊びに来たって言うから、あいさつでも、と部屋をのぞいたら、みんなバラバラに本を読んだり、ゲームをしたりしてるんだ。せっかく遊びに来たのに、あれじゃ意味がないよね」>▼<私は前日の、この家の夕食を思い出しました。飲み会や残業で忙しいおじさんが珍しく居合わせたのですが、彼はテレビの野球中継に夢中だし、おばさんは台所と行ったり来たりでほとんど座らない。子どもたちは食べてばかり、仕方なく私も食べるだけ、といったふうで結局 みんなバラバラでした>  
▼<おじさんは、子どもたちのバラバラを問題にしました。でも、遊びに来る子どもたちは学校でも塾でもお互い ほとんど毎日顔を合わせている。おじさんはわが子と一緒にいる時間がとても少ない。なのに テレビにかじりついている。子どもたちがバラバラというのなら、この親子関係はもっとバラバラなのではないでしょうか>▼<・・・自分が同じようなことをしているという自覚がまったくないのです。・・・>▼おじさんの家は、例外ではあるまい。現代の、ごくありふれた夕食の光景だろう。それだけに手紙の指摘は怖い。参考までに、手紙をくれた高校生の家庭では、食事をしながらテレビを見る習慣はないそうだ▼まず、テレビを消してみましようか。

自分も同じなのに、それは棚に上げて、人にだけ 改めることを求める。自分のことに気づかない 私たちの鈍さであり、自分は容易には変わろうとしない 私たちのその頑<sup>かたく</sup>なさを言っているのでしょう。

「変わる」ということは、本当に容易なことではないように思われます。けれども、私たちはどこかで何かが変わらなければ、より良いのちを生きることができない。それもまた、否定しがたい事実のように思われます。ある日の新聞に、こんな投稿が掲載されていました。地方の女性による、五行歌の、すなわち5行で詠<sup>うた</sup>う句の投稿です。

言葉が  
深い  
のではなく  
生き方が  
深いのである

生き方が深い、のである。問われているのはアクセサリーとしての言葉面の深さではなく、生き方そのものの深さです。それなしには、いかに言葉を並べ、どれほど格好をつけても、空虚な虚しさがそこに残ることは、そうしている自分自身が誰よりも知っているのではないのでしょうか。生き方を深くすること。すなわち、自分そのものを深くすることです。そして、破れだらけの私たち・人間にとって、それは実のところ、真実 深い方にそうしていただく以外にないようにも思われます。

今月の聖書の箇所は、「カナの婚礼」として広く知られている箇所です。ヨハネによる福音書が記す最初の奇跡物語でもあります。そこでは ほかでもない、「変わること」「変えられるということ」が中心的な主題の一つとなっています。今月はここから、聖書の語りかけを御一緒に聴いていければと思います。

紀元 1 世紀のパレスチナでは、結婚式は通常、水曜日か木曜日に催されたといいます。初婚の場合は水曜に、再婚の場合は木曜に、という慣例に従ってです。式は多くの場合、夕方、日が沈んでからもたれました。また、式の前後にしばしば、行列がなされました。夕闇が暗さを増すなか、松明の明かりに照らされて進む姿がより印象的な趣をもたらしませす。式の手順はこんな具合だったと言われています。まず、花婿とその友人たちが松明を掲げながら、花嫁の家に向けて行列を始めます。花嫁の家に着くと、花婿はとりわけ親しい友人だけを連れて、家の中に入ります。結婚式はここで、花嫁の家で行なわれました。こうして、式を終えた後、今度は誰でも参加自由で、花婿の家に向けて行列を行なうのでした。なんともロマンチックな、絵になる光景ではないでしょうか。

今回、聖書が記す婚礼は、これに続く場面です。ユダヤでは、婚礼の宴は重要なものでした。かつての日本にも似て、お返し的な要素も強く、他の家で受けたと同じ質と量のもてなしを用意することが期待されました。期間も、何日にも及ぶことが少なくありません。事を落ち度なく、つつがなく進めねばならず、何かしら不都合でも起これば、厄介な事態になることもあったといいます。そんななか、祝いの葡萄酒が底をついたというのです。もしかすると、花婿の家族は普通より貧しかったのかもしれない。必要最小限の準備しかできず、「何事もなく、うまくいきますように」と、運を天に任すような思いで婚礼の当日を待ったのかも・・・が、不安は現実になってしまいました。ユダヤ教の教師の言葉として、「葡萄酒なきところに、喜びなし」という言葉が残されています。彼らが吞兵衛だったわけではありません。ただ、当時は珈琲も紅茶もなければ、ハーブティーもコーラもありません。日常的にあったのは、水か葡萄酒です。ですから、晴れの席に葡萄酒がないと

いうのは、決して些細なことではありません。花婿の家族にとって、事態は私たちが考える以上にずっと深刻でした。

イエス・キリストの母マリアは、花婿の家族と特別な関係にあったと思われます。事態を深刻に見たマリアは、主イエスに言います。3節、「ぶどう酒がなくなりました」。福音書の編著者は、花婿が誰であったのかも、花嫁が誰であったのかも記していません。彼らと主イエスの家族との関係についても記しません。しかし、マリアが葡萄酒の心配をし、召し使いたちに指示をしていることから、単なるゲストでなかったのは明らかです。現在の聖書に組み込まれなかった後の福音書の中には、「マリアは花婿の姉だった」と記しているものもあります。いずれにせよ、マリアは主イエスに助けの手を求めました。イエス・キリストの誕生と生い立ちを知っているマリアは、「イエスなら、何とかしてくれる」と考えたのでしょう。しかし、主イエスの返答はどこか、素っ気がありません。イエス・キリストは答えます。4節、「婦人よ、わたしとどんなにかわりがあるのです」。この言い回しは今日 私たち・日本人が感じるほどには無愛想なものではないものの、とはいえ、親子の会話としてはやはり、よそよそしいものを感じられます。言葉の裏にはたして、何があるのでしょうか。それはほかでもない、公の生涯に踏み出され、神の言葉と業とを担い始められた主イエスの使命遂行の宣言であり、その旅路への出立表明とも言うべきもののように思われます。親子の関係は今やその質を変え、単なる肉の親子のそれには収め切れないものとなったのではないのでしょうか。イエス・キリストの返答に横たわる母マリアへの距離はこうした距離のように感じられますが、皆さんはどう思われるのでしょうか。そのようにして、主イエスは言われるのです。4節、「わたしの時はまだ来ていません」。イエス・キリストの時とは「十字架」の時です。私たちに真のいのちの在り処を示し、それを分かたため、十字架の上に御自身を献げられる時です。宣教の御業の完成の時です。「その時はまだ来ていない。だから、公然と、あからさまに業を行なうわけにはいかない」。そう言われたのです。

こうして、マリアの期待は、表面上は拒まれました。けれども、マリアは召し使いたちに言います。5節、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」。これはいったい、何を意味しているのでしょうか。それは、自らの期待が退けられたそのときにも、マリアはなお主イエスを信じたことを物語っているのではないのでしょうか。マリアはなおも、主イエスの善意を信じたのではないか。イエス・キリストの思いが理解できないときにも、なおも、その善意に信頼できた。信頼した。マリアはそんな人物だったように思われます。

そして、事実、主イエスはそのようなお方でした。イエス・キリストは、召し使いたちに言われます。7節、「水がめに水をいっぱい入れなさい」。そして、これに従い、「召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした」と聖書は続けます。それは、甕にはもはや何も入れる余地がない、中はすべて水であってそれ以外の何物でもないと語るもので、この後に起こされる奇跡の信憑性を裏づけるものとなっています。ちなみに、6節を見ると、甕は「石の水がめ」で、「二ないし三メートルテス入りのもの」が「六つ」あったと記されています。これは全体で600リットルほどにもなる、かなりの量です。そもそも、これほどまでに多くの水がなぜ必要だったので

しょうか。それは、ユダヤの清めの習慣によるものでした。第一に、家に入る際、足を洗うためであり、第二に、食事の前に手を洗うためでした。お客を迎えるとき、家の者は足を洗う水を用意するのが習わしだったことは、バプテスマのヨハネを紹介した折に触れたとおりです（2018年8月「1章19～28節」参照）。パレスチナの道は熱くて埃<sup>ほこり</sup>っぽいいため、足が熱くなり、かつ埃だらけになって、臭くなるためでした。そしてあと一つ、食前の手洗いです。厳格なユダヤ人は食前、まず手を上に向けて、手首の方に流れるように水を注ぎ、続いて手を下に向けて、今度は、手首から指先に流れるように水を注ぎました。片手ずつ、両方の手をそうしたと言われます。足洗いも手洗いも召し使いがその務めを果たしましたが、婚礼の宴<sup>うたげ</sup>が何日も続いた場合、これらのためにどれほどの水が必要になるか、想像に難くありません。600リットルもの甕<sup>かめ</sup>があったのは、このためでした。そして、それは6節にあるとおり、ユダヤ教の「清め」の儀式の一つとして定められていたものでした。

葡萄酒の奇跡は、ここで起こされました。ですが、福音書の編著者は、奇跡そのものについては「世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした」(9)と、実にサラッと記すだけです。奇跡の見た目ばかりに目を奪われ、何より大切なその意味から目が逸<sup>そ</sup>れてしまうことを警戒したのではないのでしょうか。だとしたら、葡萄酒の奇跡が意味するものとはいったい、何なのか。それこそが問題になります。そしてそれは、イエス・キリストには事を起こし、事を変える力がある、ということではないか。言い方を換えるなら、私たちが主イエスに触れるとき、そこで自<sup>みづか</sup>らの内にそれまでとは違う何かが生じ、生き方とその意味合いに何らかの変化が生まれる、ということではないのでしょうか。しかも、婚礼の席にあったのは、ユダヤ教の律法に基づく清め<sup>みずがめ</sup>の水甕でした。主イエスは、ユダヤ教のその清めの水を御自身の葡萄酒に変えられました。それは、儀式<sup>じゆんしゆ</sup>の遵守に代表される私たちの行ないや立派さによる救いを、イエス・キリストが御自身の恵みと伴いによる救いへと変えてくださった、ということではないか。私たちがいかに努力しようとも、主イエスの恵みなしには、神<sup>みまへ</sup>の御前に立てる者などいようはずがないからです。よく知られた聖書の言葉に、「新しいぶどう酒は、新しい革袋に」という言葉があります。マタイによる福音書の9章17節に記された、イエス・キリストの言葉です。ここでも、葡萄酒は恵みによる救いを意味しています。このように、聖書では、葡萄酒は主イエスによる良き音信<sup>おとずれ</sup>、すなわち「福音」と結んで言及されることが少なくありません。それは、外側の形ばかりに心を奪われる律法的な生活から解き放たれ、内から熟成して豊かな味わいを醸<sup>かも</sup>し出す<sup>だ</sup> そうした生き方へと向かわされることを意味しているように思われます。それこそ 実に、イエス・キリストに生かされる生活というものではないか。イエス・キリストに触れるとき、そうしたことがこの私たちの内にも生まれ始めるのではないか。葡萄酒の奇跡から、主イエスの下さる そんな約束が聞こえてくるように感じられます。

お気づきでしょうか、ヨハネが練りに練った仕方で福音書を展開していることに。ヨハネの福音書をまとめ上げた人たちは その冒頭を、聖書の初めの書「創世記」を念頭に置いて書き始めました。すなわち、「初めに、神は天地を創造された」（創世記1：1）と語る創世記の冒頭の言葉に従い、「初めに言<sup>ことば</sup>があった」（ヨハネ1：1）と書き出しています。しかも、実はそればかりでなく、1

章 19 節から今月の 2 章 12 節までの福音書の本文の冒頭部分にも同様のことが見て取れるのです。それは、イエス・キリストの公生涯の始まりを記すこの部分が「7 日間」の出来事として記されていることです。創世記の冒頭は、神の御業を 7 日に分けて記しています。そのようにして、ヨハネによる福音書もまた、7 日間の出来事をもって 主イエスの公生涯の始まりを記すのです。ユダヤの数え方に従って日を追うと、今回の箇所はその 7 日目に当たることが分かります。初めの 1 節に「三日目に」とありますが、これは、一連の流れの中では 7 日目に当たります。つまり、今月の箇所は 7 日間の括りの最後の事柄として、締め括りの出来事として記されているということです。一見、さほどのこともないように思われますが、しかし ここには、ヨハネによる福音書の福音理解が垣間見られ、その信仰の理解が見て取れるように思われます。

すなわち、創世記は天地の創造について語ります。神によって創り出され生み出される、創造の出来事です。これに対し、ヨハネによる福音書は、人の創造について語るわけです。ヨハネはイエス・キリストの内に新たな創造を見、私たちの新しい始まりを見たのではないのでしょうか。水を葡萄酒に変えられた今回の出来事が 7 日間の最後に記されているということ。それは、事の締め括りとして、このことを物語っているように思われます。「創り出す」ということは「生み出す」ということであり、何らかの「変化」がそこに生じることを意味します。葡萄酒の奇跡はヨハネによる福音書が記す最初の奇跡であって、それが主イエスの公生涯の始まりを告げる本文の冒頭に置かれている。しかも、7 日間の締め括りとして記されています。主イエスの生涯は、その全体が私たちの内に新たな何かを生じさせるものであるということです。イエス・キリストはファリサイ派のニコデモとの対話で「新たに生まれる」(3:3 他) という有名な言葉を発しておられますが、この種の表現は他の箇所にも見られる ヨハネのキーワードの一つとなっています。つまり、今月の箇所が続く 2 章 13 節以下から、主イエスの 文字どおり公の表立った活動が本格的に展開される。そして、引き続き福音書の全体が、その主イエスに触れることで生まれる新たな事柄を書き留めている、ということです。そのことを、ヨハネはその冒頭で示唆しているように思えてなりません。

田中正造<sup>たなかしょうぞう</sup>という人物がいます。栃木県の足尾銅山鉱毒問題で日本の公害運動の原点と言われる運動を闘った人物です。皆さんもよく御存じかと思えます。栃木県の小中村<sup>こなかむら</sup>という村の農家の出身で、後に第 1 回の総選挙で衆議院議員になりますが、1901 年に議員を辞し、時の明治天皇に問題の解決を直訴<sup>じきそ</sup>。生涯を鉱毒問題と治水事業に捧げました。この田中正造については 通常、社会運動家としてしか語られません。しかし、田中正造には、その生涯を支え導いた精神的な支柱がありました。イエス・キリストへの信仰です。その点に関連し、別の箇所ですでに御紹介した(元・宮城教育大学学長の) 林竹二先生<sup>はやしたけじ</sup>が次のように語っておられます。

私はかつて、田中正造のような人においては、一つの事を学ぶということは、その事において自分が新たに造られるということだと書いたことがある。学ぶということは、田中正造の師・・・新井奥邃<sup>あらいおうすい</sup>の理解にしたがえば、自己を新たにすること、すなわち、

きゅうじょうきゅうが  
旧情旧我を誠実に自己の内に滅ぼしつくす事業であった。

詳しくは省きますが、足尾銅山の鉱毒問題は、時の政府が詭弁を弄し、県内の渡良瀬川下流に位置する谷中村という小さな村の住民を犠牲にすることで騒ぎを收拾しようと図った事件でした。田中正造は、ただ一人になっても単身 その谷中村に入り、身を挺して村人たちを守ろうとしたのでした。その折の様子を、日向康さんという林先生の教え子がこう記しています。

やがて、一九〇七・・・年夏、最後まで立ち退きを拒んでいた二十戸足らずの谷中村残留民の家屋も、土地収用法による栃木県からの強制破壊を受けた。ついに谷中村は絶滅するのだが、それに先だつ四カ月前の二月初旬、足尾銅山において苛酷な労働条件に耐えかねた鉱夫たちが暴動を起こした。すると、・・・ほとんどの社会主義者・・・は労働者の暴動が社会主義革命の起爆薬になると考え、谷中村民を見捨てた。〔革命にさして役立たない谷中村を捨て、より大きな暴動の場所に転じたのである。〕小村の問題にかまけていては、革命という大事をなすことはできないと判断したからだった。

しかし、田中正造は違った。この小さな谷中村のなかに われとわが身を投げ入れるのだ。・・・たしかに、谷中村問題に身を投げ入れることは、「井戸に落ちようとする一児を助けるにも似た所為」という冷笑的な見方も可能だろう。この冷笑を社会主義者から受けて、なお、田中正造は「一児の救済」の事業に対して身命を捧げ尽くした・・・のである。

田中正造は1913年(大正2年)、癌でその生涯を終えます。枕元には、信玄袋が一つだけ残されていました。いわゆるズタ袋です。そして、その中にあったのは 日記が3冊、分厚い草稿が1部、帝国憲法を綴じたものが1部、鼻紙が少々、石ころが数個、そして 使い古された「新約聖書」1冊と愛読していた「マタイ傳」の小冊子が1部。ただそれだけだったといえます。それが、72年の生涯を生き抜いた田中正造の全財産でした。田中正造をここまで突き動かしたものは いったい、何だったのでしょうか。それは、彼の内に生きて動いた主イエスのいのちではないのでしょうか。小村の農家に生まれた彼をここまで突き動かしたもの、それは師であるキリスト者・新井奥濠によって紹介されたイエス・キリストへの信仰であり、彼の内に生きて働いた主イエスのいのちだったにちがひありません。田中正造はイエス・キリストに出会い、そこで主イエスのいのちに触れて、そして その内に新たなものを創られていったのではないか。それは、自らを捧げ尽くしても悔いのない、イエス・キリストへの信仰にあるものでした。この信仰のもと、田中正造は「日本を救う力は唯一、キリスト教にある」と考えるほどに、その愚直な生涯を生き抜いたのでした。田中が近郊教会の礼拝に出席した記録も残されています。

イエス・キリストは、母マリアの期待を表面的には退けられました。しかし、その思いの丈は御

存じでした。式を挙げたばかりの花嫁・花婿が置かれた情況も、また その家族が置かれた情況も御存じでした。そして、本質的な より深い真理に導くかたちで、それらのすべてに伝えてくださいました。600 リットルもの水が葡萄酒に変えられました。婚礼の宴が何日も続くとしても、また祝いの客が宴席を埋め尽くすとしても、皆、窮地を救われました。母マリアの心配は取り除かれました。花嫁、花婿も、またその家族も・・・です。そればかりか、花嫁と花婿は新生活を始めるにあたって、お金に換えることのできる、家計の貴重な蓄えとなる贈り物をも貰ったのでした。しかも、葡萄酒は 質においても良質なものでした。世話役は言います。10 節、「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわった所に劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました」。イエス・キリストは質においても、良いものを備えてくださった。田中正造は、世間的に見ればたしかに、苦勞の多い 厳しくきつい生涯をおくったことになるのでしょう。けれども、田中正造本人がそれをどう感じ、どう受け取っていたかは別問題です。田中正造は、世間的な見方からすれば一見 幸せとはほど遠い生涯をおくりながらも、しかし そこに満足を得ていた。イエス・キリストがそこにおられることを信じ、そこで信頼の満足を得ていた。私には、そう感じられます。主イエスによって新たなものを創られ、何事か大切なものを変えられた田中正造の姿がそこにあった、のではないのでしょうか。

たしかに、何事もそう思うとおりにはいきません。事はそううまく運ぶものではないでしょう。田中正造のような生き方を知ったからといって、それは私たちのほとんどにとって、いわゆる偉人伝の遠い世界のように響くにちがいません。ただ、私が学び取りたいと思わされているのは、イエス・キリストに触れるとき、今までなかった何かがそこで生まれてくる、ということです。それは、<sup>はた</sup>端から見たら、ほんの小さなことかもしれません。けれども、何事か それまでなかったことが自分の中に芽を出し始める、ということです。もし、そうしたことが一つとしてないとしたら、主イエスとの触れ合いはそこになかった、ということになりはしないのでしょうか。そもそも「信じる」ということからして、<sup>い</sup> <sup>かげん</sup>好い加減で、なんともおぼつかない私たちです。そんな自分が、それでも主イエスに受け入れられ、顧みられているとしたら・・・。もったいなくて、ありがたくて、感謝の思いでどこかしらから、何かしたい気持ちになってきます。「ねばならない」や「すべきだから」といったいわゆる律法的な義務感からではなく、自然な願いと祈りの思いとして、そういう自分が生まれてきます。同様の思いを的確に表現された一文を覚えておられるでしょうか。本年初めの 2 月分で御紹介した、日本キリスト教団の故・<sup>しみずけいぞう</sup>清水恵三牧師の文章です (2019 年 2 月「1 章 43～51 節」参照)。「それほどうまくはいかないにしても・・・」と断りつつ、清水先生も次のように告白しておられます。

全く虫がいい話ですが、強いて言えば、感謝できない私を受け入れて下さっているように思えて、<sup>うれ</sup>嬉しがっているのです。・・・パウロが「今では神を知っているのに、否、むしろ 神に知られているのに」と言い換えたように、神さまは私たちの知る対象では

なく、私たちを知って下さっている主体なのだという事を本当に嬉しく思います。

無理をして・・・感謝しなくてもいいんだと思ったとたん、感謝の思いがぞくぞくと湧いて来ます。・・・何かしたくなって来ます。それほどうまくはいかないにしても、精一杯生きたいものです。

このように、イエス・キリストに触れるとき、内にそれまでと違う何かが生じ、生き方とその意味合いに何らかの変化が生まれる。そして、少しなりとも良い自分になりたい、主イエスに近くありたい、そこで何かをしたい、と思わされる。「変えられる」ということは、この私にとってそういうことにほかなりません。

私たちの願いや祈りがそのままには応えられないときにも、イエス・キリストはなお、私たちの思いの丈を知っていてくださいます。そして、より深い本質的な真理に目を開かせる仕方で、私たちの内に、また私たちの間に御自身の事を創り出してください。しかも 大事なものは、それは、私たちの葡萄酒が尽きたとき、私たちの知恵が尽き 私たちの万策が尽きたときにしばしば見せられるということです。

私たちは時に、「自分は知恵者で、物事はすべて見えている。何でも分かってる」と、どこかで自惚れて生きていることがありはしないでしょうか。が 実のところ、振れて誤ったその自信が物事を正しく見る目を曇らせ、それを塞いでしまうことがあるのかも・・・。「無知の知」という言葉もあるとおりで、折に触れ そう思わされたりします。「無知の知」とは 御存じのとおり、「自分は知るべきことも知っていない、ということを知っている」という意味で、古代ギリシアの哲学者 ソクラテスの有名な言葉です。蛇足かもしれませんが、ソクラテスはこう語っています。

私は知者だと思われる人々のうちの一人のところへ出かけたのです。・・・〔ところが〕その人を仔細に吟味しているうちに、・・・アテナイ人諸君、・・・私は何か つぎのようなことを経験したのです。すなわち、・・・その人物は知恵があるものと 他の多くの人間に思われ、また、とりわけ本人がそう思いこんでいるものの、しかし実はそうではないと 私には思われたのです。・・・かれらと別れて自分だけになった時、少なくともその人物よりは自分のほうが知恵があると考えたのです。というのも、われわれのうちのいずれも 美にして善なることについては何一つ知らないようなのですが、しかし、かれは知らないくせに何か知っていると思っているのに対して、私のほうは、実際、知らないとおりのままに、知っていると思ってもいないからです。・・・つまり 私は自分が知らないことについては、それを知っていると思ってもいないという点で、知恵があるように思えたのです。その後、私はかれよりも知恵があると思われている人のうちの別の人物のところへ赴いたのですが、私はこれと同じ思いにかられたのでした。

・・・知らないことを知っていると思ひこんでいることが、どうして無知、それも最



も恥ずべき無知でないことがありますでしょうか。

2000 年以上も昔の言葉ですが、私たち人間の本质を突いて、今なお 鋭い指摘と言えるのではないのでしょうか。

教会の内と外とを越えて、私たちは繰り返し、<sup>ひとよ</sup>独り善がりの独善に陥りがちです。独り思い込むことで安心し、内に閉じ籠<sup>こ</sup>もることで安定を保とうとします。けれども、私たちはそうし続けるかぎり、新たなものが生まれることを遠ざけ、<sup>きゅうたいぜん</sup>旧態依然の小さく貧しい自分に<sup>とど</sup>留まってしまおうのではないか。そこは、息づくいのちの閉じられた世界とも言えるのではないか。<sup>まこと</sup>真のいのちに乏しい世界と言えるのではないか。そんなふうに使わされてもいます。私は、何かしらより良いものが、何かしら新たなものが内に生まれることをいつも願っています。新しいいのちが内に創られて生まれることを祈り願っています。そのようにして、自分の内で何かが変えられて変わることを、です。イエス・キリストは、それをしてくださるのだらうと思います。私たちはそのためにも、主イエスの前に自分を開くことを求められているのではないのでしょうか。

それは、いま一つ大切な視点から さらに踏み込んだ言い方をすれば、「しるし」を見抜く目を持つこと、と言えるでしょう。イエス・キリストが差し出されるサインの指し示すところを、その意味するところを読み取る目を持つことでもあります。実のところ、ヨハネによる福音書は、いわゆる「奇跡<sup>デュナミス</sup> (δύναμις, -εως, ἡ)」という言葉を一度も使っていません。そこに見られるのは「しるし<sup>セーメイオン</sup> (σημείον, -ου, τό)」という言い方であり、「業<sup>エルゴン</sup> (ἔργον, -ου, τό)」という言い方だけです。11 節に「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って・・・」とあるとおりで、「しるし」というこちらのほう<sup>もつぱ</sup>が専ら使われています。しかも、それらはいわゆる奇跡的な驚くような出来事だけでなく、普通の仕業<sup>しわざ</sup>にも用いられています。そのうえ、他の福音書に記されていることではあるものの、主イエス御自身が時に、<sup>みづか</sup>自らなされた奇跡的な業を「だれにも話さないように」(マタイ 8:4、マルコ 1:44、ルカ 5:14) と言っておられるとなれば、これら一連の事柄に何かしら重要な意味合いが隠されていることに気づかされます。それは とりもなおさず、奇跡的な出来事はそれ自体で重要なのではなく、その背後に何事か大切な真理が置かれているからこそ意味がある、ということです。だからこそ、ヨハネによる福音書はそれらを「しるし」と呼んで、いわゆる奇跡的な出来事だけを特別扱いしなかったのではないのでしょうか。そして、イエス・キリスト御自身もまた、だからこそ、いわゆる奇跡的な業が単に人々の目を惹き付けるだけのものになることを嫌って、時に それらに消極的な態度を取られたのでした。

奇跡的な出来事は、神様の真理を指し示すかぎりにおいて、また意味ある事柄を指し示すかぎりにおいて 価値があります。それは、単に人目を惹くだけの売り物でもなければ、人寄せの手段でもありません。主イエスは、単なるマジシャンではありません。私たちは、しるしの背後に置かれた神の真理を見抜く目を持つこと、しるしの意味するところを読み取る目を持つことを期待されているのではないのでしょうか。そのとき、イエス・キリストによって 恥ずべき無知の目を開かれ、新たな何か

が内に創られるにちがいありません。真<sup>まこと</sup>のいのちにつながる何か・・・。

婚礼の舞台・カナは、ガリラヤの小さな町でした。花嫁も花婿も、またその家族も、豊かな人たちではありませんでした。すべてが目立たない片隅での出来事でした。しかし、主イエスの最初の重要なしるしは、そこで起こされたのでした。ここでもまた、イエス・キリストは小さく低いところに立たれました。ヨハネは11節において、「それで、弟子たちはイエスを信じた」と語ります。弟子たちは（たしかに、いまだ不十分なものではあるものの）、しるしが何を意味するのか、それなりに感じ取る心を持っていたのでしょう。こうして、弟子たちは主イエスへの信頼を深めていったのでした。

日々のあれこれの中に、日常の小さな事柄の中に、イエス・キリストのしるしを見て取れる私たちでありたいと願います。そして、そこにおいて、それぞれがそれぞれのあり方で弟子たちの一人に、また小さな田中正造になれたらと願います。私たちの日々は、楽しいことばかりの、いわゆる薔薇色<sup>ばらいろ</sup>の毎日ではないかもしれません。が、たとえ苦闘の中にあっても、主イエスは私たちのいるそのところにおられる。変わることなく、私たちの生きるそのところにいてくださっていることを信じて、しるしとその意味とを見て取れる私たちでありたいと願います。ガリラヤのカナで水を葡萄酒に変えられた主は、今この時も同じように、創造と恵みのしるしをもってそこに臨んでくださっているからです。

三日目に・・・イエスは・・・最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。

ヨハネによる福音書は、この後、本文の本体そのものに入っていきます。

〔祈り〕

愛する神様。

私たちは「どこかで何かが変わらなければ・・・」と思いつつも、容易にはそうならず、昨日と同じ今日<sup>きょう</sup>を重ねて生きています。それなりに平穏で安全な今があるからかもしれません。けれども、そうあり続けることで、もっと生き生きとした、もっと意味の感じられる日々を手にできずにいるのかもしれない。表面的な命でない、より深い真<sup>まこと</sup>のいのちに生かされずにいるのかもしれない。そうも思わされます。

恵みの神様。

あなたの御子<sup>みこ</sup>イエス・キリストのほうへと 一歩、私たちを押し出してください。

讚美歌の詩人は詠<sup>うた</sup>いました。

「見える目を我に与え給え。彷徨<sup>さまよ</sup>う魂を 主は救い給う。幻を我に与え給え。くすしき

わたしの心に・・・

み<sup>たま</sup>霊よ、我に宿りませ。・・・十字架にひれ伏し、我が身委ね、すべて主に<sup>ささ</sup>献げて、恵みに<sup>あふ</sup>溢る。幻を我に与え給え。くすしきみ霊よ、我に宿りませ」

(『新生讃美歌』(1991年 旧版) 147番、日本バプテスト連盟)

私たちに見える目を与え、あなたの<sup>みすがた</sup>御姿を見させていただきますように。そして、私たちを変え、あなたのいのちに生きられる者としてください。

主イエス・キリストの<sup>みな</sup>御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン